

# 浜名湖花博における植物展示

浜名湖花博屋内展示担当部長

山田 達 男



ほほえみの庭

「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」を開催テーマに静岡県浜名湖畔で開催していた「浜名湖花博」は、187日間の会期中に540万人余の観客が来場し、10月11日、その幕を下ろした。開催地周辺はわが国有数の園芸産地であるが、奇をてらうことなく園芸博覧会の原点である植物の魅力の情報発信に徹するとともに、開催地にふさわしい良質の花と緑を会場全体にふんだんに展開したことが、幅広い来場者の賛同を得たものと考えられる。「浜名湖花博」における植物展示の計画づくりに携わった立場から、植物展示の一端を紹介する。

「浜名湖花博」における植物展示の最大の特徴は、今までの園芸博覧会にない花緑の量と種類の豊富さである。会期中に使用した花は、6,000品種、500万株。樹木は恒久、仮植を合わせて8万本に上る。主要な植替え作業だけでも5回、平均すれば毎日2万株以上の花を植替え続けたことになる。特に一大植物コレクションガーデン「百華園」や、60万株の花と音楽が融合した「ほほえみの庭」は、連日多くの観客で賑わった。

1990年に開催された大阪花博が、現在のガーデニングブームの引き金になったとされている。大阪花博を境にして、多くの一般家庭で花が植えられ、ホームセンターには多様な植物や園芸資材が置かれるようになった。しかしながら現在のところ、植物の基本的な性質や植栽の条件、栽培技術などを十分に理解してガーデニングを行っている人はごくわずかであり、さらには品種情報については一部の植物以外には、ほとんど知られていないのが現状である。

ガーデニングの本場イギリスでは、使用される植物の種類の高さもさることながら、多くの人々がナーセリーから直接種苗を購入するなど、品種レベルで植物が扱われている。日本においても、多様化する消費者のニーズに応えるため、より詳細な品種情報を提供することがガーデニングの質を高め、今後の園芸文化の発展につながる。このような考えのもと、「百華園」では植物や品種に焦点を当て、一般の園芸店などでは

通常は見られない多くの品種や原種を展示した。パンジー・ビオラだけで800、ペチュニアは400品種を紹介したが、多くの観客が植物の奥の深さを認識し、これからのガーデニングに役立つヒントを得てくれたことであろう。第二の特徴は、植物の魅力を引き出すための周到な修景や花壇設計にある。植物単体で観るよりもその魅力が一層際立つよう数々の工夫を施している。

目標とした来場者500万人を達成した時、識者が「花の威力の大きさを感じた」とコメントしていたが、全く同感である。そしてさらに、人の手で花がもつ魅力を引き出し、最良の状態で展示することによって花は一層輝きを増し、多くの観客を魅了する。これも花博を開催する側に身を置いてみて改めて実感した。

花博に来場された観客は、「百華園」や「ほほえみの庭」だけでなく、トイレや休憩所、売店の壁面など、会場のいたるところに展示された花や、カラーリーフの効果的な組み合わせ、さまざまな立体花壇など、花緑の魅力を最大限引き出す努力がされていたのをご覧になったことと思う。その他、コンテナを使用した組み合わせ式の生垣や、フォークリフト用のパレットを用いた移動式の花壇など、新しい展示技術の試みや、膨大な量の植物を計画どおりに調達するための生産体制など、他にも紹介すべきことがたくさんあるが紙面の都合で割愛する。

園芸・造園関係の識者の指導を受けながら展示計画の策定を進めたが、南半球も含めて日本と同緯度地域を原産とする未だ園芸的な利用が進んでいない植物の紹介や、世界中の葉数の異なる松類のコレクションなど、具体化しなかった計画も多くある。すべてが計画通りに実現できた訳ではないが、花博で取り組んだ植物展示がこれからのガーデニングの参考となり、人々の暮らしがより豊かになることを願っている。

なお末筆で恐縮であるが、「浜名湖花博」の開催にあたっては、多くの「花葉会」の会員の皆様にご支援をいただいた。ここに心から感謝を申し上げます。